

高等学校家庭科における衣生活に関連した伝統文化の学習[†]

— 第2報 植物染料による染色の教材化と授業実践 —

清水 裕子*・池原 佳子**・佐々木和也*

宇都宮大学教育学部*

大阪府立佐野工科高等学校**

本報では、生活文化に関連した伝統的な染色とその色のもっていた意味を考えた上で、植物染料による染色の実習を行う実践授業を試みた。それによって、生徒がこれらの布を用いた人々の生活と「こころ」についても考え、現代の自分たちの生活を振り返り、それにもとづいて新たな生活の創造をめざすことを目的とした。

キーワード: 伝統文化、手仕事、藍、ウコン、色、産着

1. はじめに

第1報においても述べたが、われわれの祖先が伝承してきた生活文化にかかわる伝統的な手仕事を大切にし、後世に伝えていくことは重要であり、生活文化の歴史および先人の知恵や技術を理解し、これからの生活文化のあり方を考えることは、新たな生活文化の創造にもつながり、生活をより豊かにすることにもなる。したがって、家庭科において伝統的な生活文化を取り上げることは意義が大きい。そこで、第2報においても、衣生活にかかわる伝統的な生活文化を高等学校家庭科において教材化することとした。本報では、植物染料による伝統的な染色についての教材化と授業実践を行った。

現在の生活のなかでは色があふれ、衣服も色とりどりに化学染料で染色されている。しかしながら、化学染料が発明される前は、紀元前数

千年の昔から、衣服は草や木の葉、花、実、樹皮、あるいは動物、鉱物など天然の染料で染色されていた。これらの染料は貴重で、そのために色も象徴的な意味をもっていた。染色された布は単に実用的な「もの」とどまらず、人の「こころ」と深く結びついてきたのである。布は時間をかけていねいに染色され、そして大切に使われてきた。

そこで、本研究では、伝統的な染色の実習を授業に取り入れるだけではなく、生活文化と関連して、染色やそれらの色のもっていた意味も考えた教材づくりを行い、実践した。すなわち、生徒たちがこれらの布を用いた人々の生活と「こころ」についても考え、現代の自分たちの生活を振り返り、それにもとづいて新たな生活を創造できるようになることをめざした。また、染色過程では、視覚、嗅覚、触覚など五感に訴える場面を伴うので、五感を使って感じ取り、それによって体験を豊かにしたいと考えた。

従来の研究としては、植物による染色を教材化するために植物染料の特性や染色方法を検討

[†] Hiroko SHIMIZU*, Yoshiko IKEHARA** and Kazuya SASAKI*: Teaching of Traditional Clothing Culture in High School Home Economics. Part2. Practical Teaching of Herb Dying and Color.

* Faculty of Education, Utsunomiya University

** Sano Technical High School

した報告¹⁾、「草木染」の授業実践についての報告²⁾にとどまっております、植物染料による染色の実習だけではなく、伝統的な生活文化と関連させて、現代の生徒自身の生活を振りかえらせる授業はみあたらない。

2. 染料植物による染色と色の象徴性

今回の実践授業では、伝統的な染色の実習として、ウコン染と藍染を行った。さらに、紅花とウコンで染められたものとして、伝統的な産着を取り上げ、それらの色のもつ意味を考えることにした。

万葉の時代から、染色された衣服は貴重であり、それ故に染めるということも特別な意味を持っていた。万葉人にとって、染めることはただ衣服に色をのせるのだけではなく、その人の「おもい」も染め込んでいたのである。くれなゐ（紅花）やむらさき（紫草）を詠んだ歌はとくに多い。これらの多くは恋の歌でもある。また、草木を用いた染料は、褪せやすいものも多い。そのはかなさゆえに、大切に思うところがつよく、多くの歌に詠まれたのであろう。人のこころの移ろいやすさに擬して歌われたものも多い。

詫間野に生ふる紫草衣に染めいまだ着ずして色に出にけり
(万葉集 3・395)

鴨頭草の変ひやすく念へかもわが念ふ人の言も告げ来ぬ
(万葉集 4・583)

例として二つの歌³⁾をあげたが、これらの歌から万葉人の染色された「もの」と「こころ」の深いつながりを感じる。

また、白や赤は、神の象徴として神聖視されていた。仏教や神道においても色は意味をもっていた。五行思想と色は不可分の関係にある。地位や身分とも色は深い関係にあり、冠位十二階はその端的な例である。

また、染色に用いられる植物には薬効⁴⁾が

あり、染料と同時に薬としても貴重であった。紅花の薬効は血行障害改善や疱疹避けと考えられており、それにより、染色した色にも同様の効果が期待され、紅花で染めた衣服は乳児を病気から守るとされてきた。さらに、赤い色自身が魔よけ、疱疹よけとして使用され、赤い色の産着が多く用いられてきた^{5,6)}。ウコンは通血、黄疸に薬効があるとされ、紅花と同様にウコンで染めた黄色い産着にもその効果が期待され、さらに黄色自身が象徴的に使用されてきた⁵⁾。

そこで、実践授業1では、第1回目の授業で、産着を対象とし、子どもの健やかな成長への願いが込められた伝統的な紅花染とウコン染の産着について取りあげ、第2回目の授業でウコン染の実習を行うこととした。紅花の赤は、神につながる色として魔よけの意味が最も強く込められていること、ウコンは実践を行ったA高等学校の所在地でウコンを多く産出していることから、教材として取り上げることは意義があると考えた。

実践授業2では、藍染を取り上げた。かつて日本は藍の国、藍の色はジャパンプルーといわれていた⁷⁾。江戸中期にもめんが庶民へ普及して以来、藍染もめんの着物が庶民の服装になった。手織りの綿布を紺屋で染めてもらって用いたのである。その染めには庶民の祈りがこめられていた⁸⁾。日本を代表する伝統的な色である藍を染色することによって、日本の庶民の生活文化を考えることにつなげたいと考えた。

3. 実践授業1「産着を選ぶ」・「ウコンで染めよう」

実践の対象は、A 女子高等学校普通科1年の2クラス、いずれも40名である。家庭基礎の授業において実践を行った。

(1) 単元設定と実践授業の概要

単元名は「衣生活を営む」とした。内容は、①衣生活を見つめる(2時間)、②健康で快適

な衣生活のために（4 時間）、③主体的に被服を選択する（2 時間）、④被服の文化を知ろう（2 時間）である。

第 1 回目の実践授業は、「③主体的に被服を選択する（2 時間）」において、「産着を選ぶ」と題した授業を、第 2 回目は、「④被服の文化を知ろう（2 時間）」において、「ウコンで染めよう」と題した授業を行った。それぞれの内容は、以下の通りである。

「主体的に被服を選択する」

- ・衣服を購入・着用する際の選択基準について考える。
- ・自分だけではなく、家族の衣服にも考えが及ぶようにする。

「被服の文化を知ろう」

- ・日本の被服文化を知る。
- ・日本の被服文化の一つとして、ウコン染について実習する。実習によって完成させたウコン染を発表しあい、お互い良さを伝え合う。

第 1 回目の授業は、紅花とウコンで染色された伝統的な産着についてのみ行う授業ではない。衣服を購入・着用する際の選択基準について考え、その際に自分だけではなく、家族の衣服にも考えが及ぶようにすることをめざしたもので、自ら衣服を選択できない乳児の衣服である産着を対象として授業を進めること、そのなかに伝

統的な産着とその色、それらに込められた親のおもいについて学習することとした。それに引き続く第 2 回目の授業では、これら赤や黄色に象徴的な意味をもたせた伝統的な産着についての学習の上に、被服文化としてのウコン染を実習することとした。

（2）産着の準備

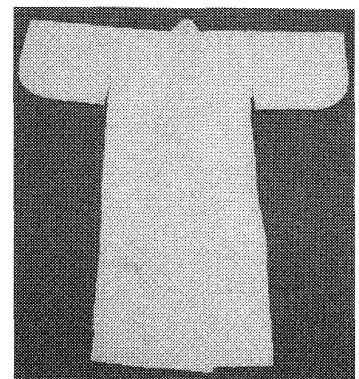
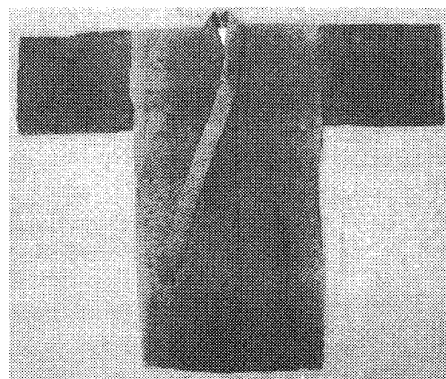
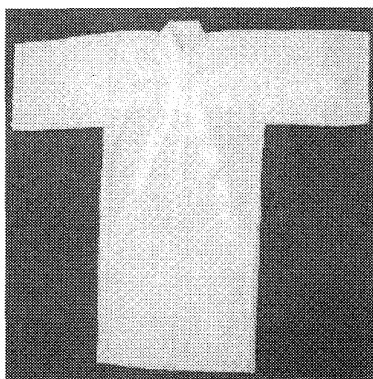
第 1 回目の授業のために、伝統的な産着 4 種類と現代の産着 4 種類、計 8 種類の産着を提示資料として準備した。

伝統的な産着は、白いもめん、紅花染のもめん、ウコン染の絹の 3 種の産着を作成し、ウコン染のもめんの産着（綿入り）は知人が乳児の時に着用していたものを借用した。白いもめんの産着はさらしを用いて単衣に縫製した。紅花染のもめんの産着は、染色された古布を骨董市で購入し、単衣に縫製した。ウコン染の絹の産着は絹をウコンで染色し、袷に縫製した。作成した産着の写真を図 1 に示した。

現代の産着は、現在乳児を育てている、または最近育てた経験のある母親から産着を借り、その中から、特徴的代表的なものを選んだ。オーバーオール型のもの 3 種、着物型のもの 1 種である。その他、様々な産着の写真も準備した。

（3）評価方法

実践の評価については、授業時に生徒に配布した学習プリントを用いた。学習プリントの内



（a）さらしもめんの産着（単衣）（b）紅花染のもめんの産着（単衣）（c）ウコン染の絹の産着（袷）

図 1 作成した産着

容は段階を追って学習できるように設定している。各設問は自由記述であるので、含まれているキーワードをもとにその回答を分類し集計した。

また、体験を伴った授業であることから、授業時の生徒の言動や表情の変化などからも評価することとした。

(4) 実践授業の内容

第1回目の授業「産着を選ぶ」は2005年5月16日に授業を実践した。第2回目の授業「ウコンで染めよう」は2005年9月26日に実践した。ウコンによる染色は、日常的に使用できるものがよいと考え、輪ゴムでの絞りによる防染を入れたウコン染の弁当風呂敷を製作することにした。

学習の目標と授業の観点を表1に示した。第1回目の授業の展開を表2、第2回目の授業の展開を表3に示した。

(5) 実践結果および考察

授業中の様子を図2と図3に示した。

①第1回目の授業「産着を選ぶ」

本論文の趣旨である産着の染色と色に関連する部分のみ示す。

例示した紅花染とウコン染の産着に関して、植物による染色と色にこめられた意味について多くの生徒が記述していた(74人中46人)。

また、昔の人の産着選択に関して、魔よけを考

慮しているという考えも多数(40人)を占めた。昔の人が子供の無事な成長を産着に託していたこと、それが産着の色にあらわれていたことを理解していることがわかる。親の子への愛情が産着選択に反映されていること、自分が親となったときにも、子のために見た目重視ではない選択基準を考えておきたいなどの記述もみられ、学習の目標を達成したと考える。

また、生徒によって描かれたデザイン画には、伝統的な染色や魔よけの模様などに注目して、デザインとして取り入れていたものもあった。

②第2回目の授業「ウコンで染めよう」

ウコンで染めるためには、まずウコンを煮て染色液を作らなければならないが、生徒はすぐに染色できると思っており、その過程が面倒くさいという声も聞かれたが、それにもかかわらず全員積極的に煮出す作業を行った。また、ウコンは染色と媒染を何度か繰り返さなければならないが、実際に染色をして、その手間が大変だと感じたこと学習プリントに記している生徒が多くみられた(33人)。このように、染浴の準備と染色・媒染に時間と労力をかけなければならないが、それだからこそ愛着がわき、出来上がった作品を大切にしたいと感じ、その過程のなかで「おもしろい」を込めることができたと思われる。

表1 学習の目標と授業の観点

第1回目 「産着を選ぶ」	学習の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・衣服の選択において、肌ざわりなど、見た目のデザインだけで選ばない方法を考えることができる。 ・伝統的な産着の色の持つ意味を理解することができる。 ・伝統的な産着と現代の産着を比較し、親の「おもしろい」について理解することができる。 ・自分の考えを述べ、友達の考えを聞き、積極的に意見交換ができる。 ・学習したことをいかし、家族の健康を考慮した衣服について考えることができる。
	授業の観点	新しいことを学びながらも、これまでの自分の経験をいかしながら主体的に活動できるよう、自分の考えを発表したり、自分の考えにもとづいてデザインを考えるなどの機会を設けたが、これらは、今後の自分と家族のことを考えた衣生活を考える上で、また、家族と自分との絆を考える上で有効な手段となったか。
第2回目 「ウコンで染めよう」	学習の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が積極的に染色に参加し、五感を通して過程を感じることができる。 ・伝統的な染色とそれにこめられた「おもしろい」について、染身体験から考えることができる。 ・自分自身が感じたことを述べることができる。
	授業の観点	前時で学習した内容をふまえ、染色を自らが体験することを通して、生徒自身が主体的に他者とのかわり、およびその関係を考える上で有効な手段となったか。

表2 「産着を選ぶ」の展開

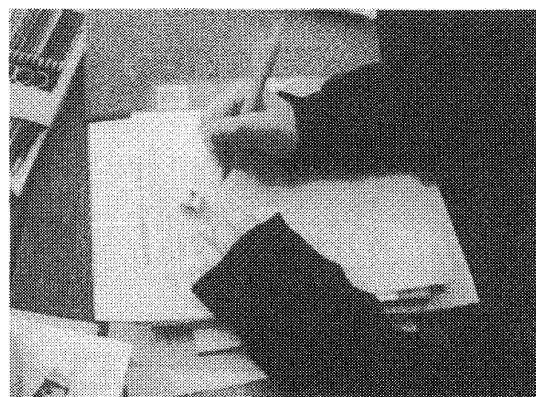
具体目標	学習活動	学習活動への支援・評価（◇）	教材	
○前時の学習を振り返る。	1. 前時の学習を振り返り、衣服購入のポイントについて確認する。	○衣服選択の際には、見た目だけではなく、その素材や管理についての絵表示を確認することが大切であることを確認させる。 ○前時の学習を振り返り、生徒自らが積極的にポイントを確認できるよう支援する。	・学習プリント1	
○家族の衣服選びについて前時に学習したポイントをいかして、選択基準を設けることができる。	2. 自分だけではなく、家族の生活形態や年齢を考え、衣服選択にどのような基準を設けたらいいのかについて、意見を述べる。	○各ライフサイクルにおいてその特徴を示すことで、違いをつかみやすいようにする。 ○自分の家族の年齢や健康状態を思い浮かべて、考えやすくなるように助言する。		
○視覚のみではなく、五感を使って産着を比較し、選択することができる。	3. 産着（乳児服）に焦点を当てる。産着を数種類用意し、その中から各産着の特徴について考え、学習プリントに記入する。 ①見た目 現代の産着 4 種および伝統的な産着 4 種 ②素材 様々な繊維の布を渡し、選択させる。 a. 綿 b. 絹 c. 麻 d. ポリエステル e. ナイロン	○なぜ産着を取り上げるのかについて説明し、取り組みやすくする。 ○産着の詳細な説明はせず、生徒が自らその特徴をつかみとることができるよう助言する。 ○見るだけでなく、触ったり衣擦れの音を聞くなどして確認するよう助言する。 ○実物の産着を教室の真ん中に提示し、五感を使った選択ができるようにする。（自由に触ってみる）		
◇見た目だけではなく、五感を使った産着の選択ができている。				
○産着の特徴について意見を交換し、さらに産着の選択にはどのような基準を設けたらいいのかについて、理由やその特徴を述べながら、自分の意見を発表することができる。同時に友達の見解を聞き、コメントを交換したり話し合うことができる。	4. 各班で自分たちがどの産着を選択したかを、その理由を添えて発表する。	○どの産着を選択したかだけではなく、その理由も発表しあうことができるよう助言する。 ○話し合いやコメントが非難・否定的にならないように、自分たちの意見が発表し合えるようにする。	・親の選択基準についてのワークカード ・色鉛筆 ・クレヨン ・学習プリント3	
◇積極的に自分の意見を発表することができ、友達の見解も聞き、お互いにコメントを交換したり話し合いをすることができる。				
○親の産着の選択基準を知り、自分たちの選択基準と比較検討することができる。	5. 親は実際にはどのような点を基準にして産着を選択しているのかについて知り、自分たちの選択基準とその理由を比較検討する。	○親の選択基準とその理由に注目して見るように助言する。 ○自分たちの選択基準と異なるところはないか、気をつけて見るように指示する。		
○各産着の説明を聞いて、とくに伝統的な産着の色や形の由来・意味を理解することができる。	6. 産着の詳しい説明を聞き、自分たちが選択した産着と比較しながら、その産着について考えを深める。	○自分たちが衣服を選ぶ時とどのように違うのかを考えながら聞くことができるようにする。 ○「この産着を選んだ人は？」と質問をして生徒に挙手をさせるなど、ただ話しを聞いているだけにならないようにする。		
○得た情報をいかし、自分の考えをまとめ、それを表現することができる。	7. 自分の子どもにはどのような産着を着せたいかを考え、「○○家の産着」をデザインする。	○上手に産着の絵を書くことよりも、どのような点にポイントを置いてデザインをしたか、見た目だけでなく細かいポイントも明記するよう助言する。		
◇自分の考える産着について、得た情報をいかし、他の人が見ても分かりやすいように表現することができる。				

表3 「ウコンで染めよう」の展開

具体目標	学習活動	学習活動への支援・評価（◇）	教材
○前時の学習を振り返り、産着の色に込められた親の「おもい」について確認することができる。	1. 前時の授業を振り返り、産着に込められた「おもい」と、それに対する自分の考えについて、学習プリントを見ながら確認する。	○生徒が書いた学習プリントや、特徴的であった意見を示して、前時の学習内容を思い出しやすいようにする。	・染め方のプリント ・ウコン ・輪ゴム ・染色布 ・ミョウバン
○ウコン染の実習に積極的に参加し、どのような過程を経て染色されるのかを体験から理解することができる。	2. ウコンの煮出しを班ごとに協力して行い、煮出している間、生徒一人一人が輪ゴムを用いて防染文様を作成する。さらにウコンによる染色とミョウバンによる媒染を行い、染色にはどのような手間が必要とされるのかを体験する。	○染色手順を理解しやすいように、スライドで絵とともに示す。 ○染色がスムーズに行えるように、机間指導をしながら、迷っている生徒に助言をする。 ○火を使用するので、火傷に注意するように指導する。	
○染色について知るだけではなく、実際に染めてみて、感じたことを述べることができる。	◇一人一人が積極的に染色に参加できる。		・学習プリント
	3. 手間がかかる染色（染料の作成も含め）を実際に行ってみて、どのように感じたか、意見を述べる。また、染色に「おもい」をこめることについても同時に考える。	○前時の授業と合わせて、染色を通して「おもい」を感じ、伝えることについて、生徒一人一人が自由な意見を述べるように助言する。	
◇自分自身が感じたことを述べることができる。			



(a) 産着に直接触って確かめる



(b) 自分だけの産着をデザインする

図2 産着の授業中の様子

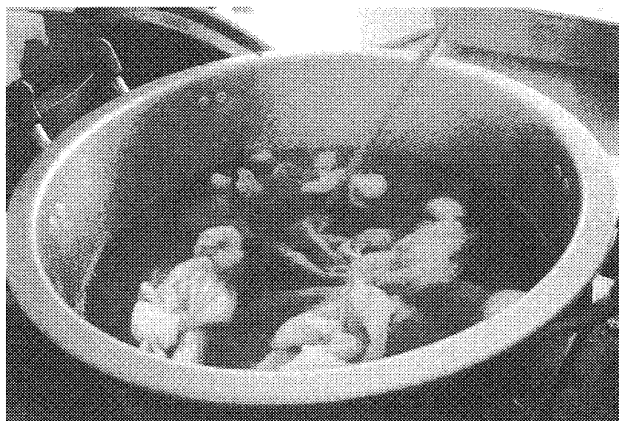
五感より得られた印象については、ウコンのにおいが臭かったという感想が数多く記されていた（35人）。ウコンは漢方薬としても使用されており、強いにおいを発する。そのにおいについて、漢方薬のようなにおい、体に良さそうなにおいと、概ねプラスの評価であった。

ウコン染の色である黄色が植物染料から得ら

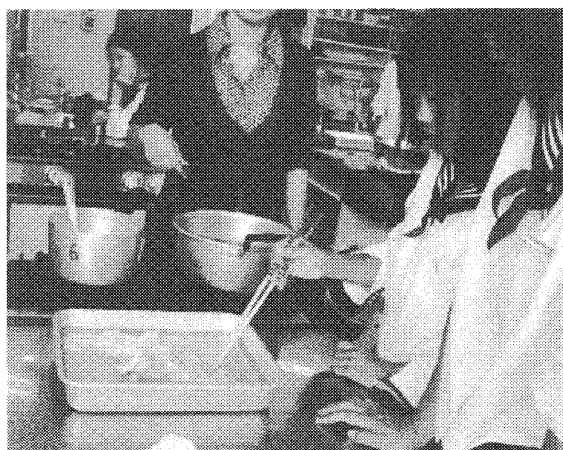
れるものとは思えないような鮮やかな色であるので、その印象が強く、とくに染液に白布を入れたとき黄色に変化することで、生徒に驚きをもたらされた。また、媒染液に浸した際に、さらに鮮やかな黄色に変化すること大変興味を示し、その印象が強く残ったようである。多くの生徒がこの変化をワークプリントに記入して



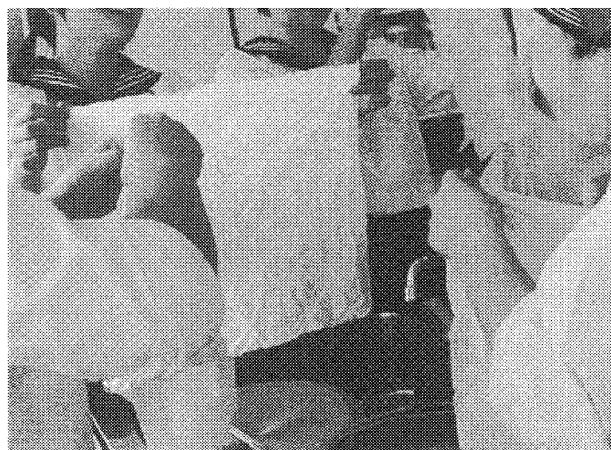
(a) 輪ゴムで絞り模様をつくる



(b) ウコンで染色する



(c) ミョウバンで媒染する



(d) できあがり

図3 ウコン染の授業中の様子

いた（黄色 30 人、色の変化 16 人）。体験的な学習において目で捉える変化は印象深く、後にまで残りやすい。そのため、視覚的に生徒の目をひきつけることのできる題材は大変効果的であり、同時に学習への意欲をかき立てることができる。

また、前回の産着の授業をふまえたウコン染についても言及しており、子供の将来や健康のことを考えた染色（17 人）とか、天然染色だからこそ得られる安全性が子供の産着には良いのだと考える（7 人）など、染色がつなぐ親子の関係について考えることができた。

4. 実践授業2 「沈殿藍で手ぬぐいを作ろう」

実践の対象は、B 高等学校定時制課程 2 年 2 クラス、計 38 名、実施は 2005 年 10 月 3 日、

家庭総合の授業において行った。

本実践では藍染染料として沈殿藍を使用した。日本の伝統的な藍染染料はすくもであるが、沈殿藍の方が作成しやすいので、著者らがあらかじめ沈殿藍を作成して使用した。沈殿藍は染色の際に染液や染色した布の色が変化すること、また独特のにおいがあることから、嗅覚や視覚効果が高く、五感を使った実践ができると考えた。また、すくもについては、すくも作成過程に行う攪拌を体験することとした。

(1) 単元設定と実践授業の内容

単元名は「衣生活を営む」とした。内容は、①人と衣服のかかわり（4 時間）、②衣服は何かからできているのか（4 時間）、③よりよい衣生活を創造する（4 時間）、④自分たちの衣生活を考える（2 時間）である。

実践授業は、「①人と衣服のかかわり」において、「沈殿藍で手ぬぐいを作ろう」と題して2時間の授業を構成した。このてぬぐいは、2学期後半から始まる調理実習の際に頭覆い布として利用することを目的に作成することにした。学習目標と授業の観点を表4に、授業展開を表5に示した。

(2) 評価方法

実践の評価は、授業時に生徒に配布したワークプリントを用いて行った。実践内容の確認と振り返りを合わせて、生徒一人一人にワークプリントを配布し、学習課題とした。内容としては、染色中に感じたことや染色して出来上がったものをどう使用する予定であるかなどである。すくもの攪拌体験に対する記述欄も設けた。各設問は、全て生徒の自由記述とした。

また、体験を伴った授業であることから、授業時の生徒の言動や表情の変化などからも評価することとした。

(3) 実践授業の結果

生徒の染色へ対する興味は、1時間目からみられた。沈殿藍の製作過程における消石灰を混ぜ攪拌するときの液の色の変化の写真（パワーポイント）に大変興味を持ち、「もう一回最初から映して」との発言がみられた。剣道の道着やジーンズにも藍染が使用されていたということから、自分達の身近なところに藍染が存在していたということに「藍染だったんだ」と認識を新たにしていた。「すくものは土みたいなのにけっこうきれいな色が出るんだね」といった藍染に対して肯定的な感想が得られた。

各自の模様づくりの輪ゴムや紐での絞りにおいては、例示の模様をどのように出すのかを質問をしたり、独自の模様をめざして積極的に活動に取り組んでいた。対象の生徒たちは、これまであまり集中力が続かず、途中で放り出してしまう傾向が強かったのであるが、この時間に

おいては興味を引き出すことができ、集中して取り組めた。

本実践で作成した藍染のてぬぐいは調理実習に利用することを目的に作成したのであるが、生徒のワークプリントで自分の作品をどのように利用したいのかを質問したところ、「せっかくきれいに染めたのだから、日常品として利用するよりも、作品として飾っておきたい」という答えがあげられた。また、大好きな祖母あるいは曾祖母にプレゼントするという答えがあった。ものやひとに対する「おもい」があらわれた回答だと思われる。

藍染の実習では、染液を作るところから始めた。沈殿藍を建て、布を入れる前には、ムラを防ぐために「藍の華」と呼ばれる泡を取り除かなければならない。その作業を全員がていねいに行っていた。それまではふらふらと教室内を徘徊していた生徒がみられたが、始めると、実に真剣な表情で取り組んでいた。実際に自分の体を動かして体験をすることで、授業の内容に取り組みやすく、生徒の集中力を持続させたと考える。

染液に布を入れたときの一瞬の色の変化に興味を持った生徒が多くみられた。また、染色過程の色の変化に興味をもった生徒もみられた。本実践で使用した沈殿藍は建てることによって黄色から緑色、そして青へと変色する。その変化は還元と酸化によって起こるのであるが、布から目を離さずに見ておかなければ、その変化を見逃してしまう。この変化に注目したことで、手間のかかる藍染を楽しく行うことができた。

「作業が楽しかった」や「手間が大変」といった意見も見られ、手間を感じ取るとすることで、自分がていねいに製作したものへの「おもい」が自然にこめられたと感じられる。

また、一人一人、異なった色にできあがったと記入している生徒がいた。染色は手作業であ

表4 学習の目標と授業の観点

学習の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・時代の変遷とともに、伝統的な生活のしかたや身の回りのものがどのようにして変化していったのかを、自分の生活と比較しながら考え、それらのことをふまえて今後の自分の生活を設計しようとすることができる。 ・自分の手ぬぐいを作る作業に、積極的に参加し、五感を使って染色過程を感じとることができる。 ・染色を体験することで、そこに必要となる手間について知り、手間をかけて作成するときに、形成されるひととものつながり、ひととひとのつながりについて考えることができる。
授業の観点	<ul style="list-style-type: none"> ・時代の流れとともに、伝統的な生活文化から現在の生活へと、私たちの生活を取り巻く道具類が変化してきたことに改めて気づき、その背景や違いについて考え、生徒自身が自分の現在の生活を振り返り、考えを深めるきっかけとなったか。 ・自らが手間をかけて手ぬぐいを作成することを通して、ものを大切にすること、ひとともののかかわり、ひととひとのかかわりについて考えるきっかけとなったか。

表5 「沈殿藍で手ぬぐいを作ろう」の展開

具体目標	学習活動	学習活動への支援・評価（◇）	教材
1 時間目 ○現在の暮らしと昔の暮らしの変化を知り、人と衣服のかかわりについて知ることができる。 ○過去に庶民の身近な存在であった藍染について考えることができる。 ○自分の模様を作り出そうとすることができる。	1. 身近なものでも、時代の流れとともにその形態が変化していることに気づき、生活にかかる労力の差が大きいことに気づく。同時に人々が衣生活をどのように営んできており、それがどのように変化してきたのかを知る。 ・洗濯板→洗濯機 ・ほうき→掃除機 ・ふろしき→鞆 2. 藍染について、その原料や染色工程、および人々の生活や「こころ」にどのようにかわってきたかについて知る。 3. 染色に先立ち、自分だけの手ぬぐいを作るために、輪ゴムや紐で結び、絞る。	○生徒に身近である鉛筆を例に出し（筆→鉛筆）、考えやすいよう助言をする。 ○現在の暮らしと昔の暮らしを比較することで、藍染について興味を持つことの手がかりとなるようにする。 ○生活と藍染のかかわりに重点を置くことで、人々がどのようにして染色と付き合ってきたかを理解させる。 ○藍染がもつといわれている効用について紹介し、藍がいかに人々に重要視されていたかを考えさせる。 ○絞り方の例と、出来上がりの模様の出方を提示し、生徒一人一人が自分の好みの模様を出しやすいように助言する。	・洗濯機や掃除機など、時代の流れとともに変化してきた道具の写真 ・藍染の工程の写真 ・藍染された品 ・藍染の手ぬぐい ・絞りの例を示した白布
2 時間目 ○染色に一人一人が積極的に参加することができる。 ○染色にはどのような手間が必要であるかを、体験することによって実感することができる。 ○本時を振り返り、手仕事の手間とその価値について考えることができる。	1. 一人一人が積極的に染色に参加し、実際に藍染を体験する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">◇染色作業に積極的に参加できる。</div> 2. 染料（すくも）を作成する段階に部分的にかかわり、手間を実感する。また、においや手触りなど、独特の感触を五感を使って実感する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">◇五感を使って積極的に染料（すくも）にかかわることができる。</div> 3. 藍染を通して感じたことや考えたことを自分の言葉で、ワークプリントに記入すると同時に、手仕事の価値について考える。	○染色の準備をスムーズに行うことが出来るよう、説明を十分に行う。 ○身体を動かし、においや手触りなど、五感を使って染色を体験することができるよう助言する。 ○実際に染料を作成することに少しでもかかわることで、その手間を実感しやすいようにする。 ○ただ染色するだけでなく、それを今後使用することも考えて自分の意見をまとめるよう助言する。 ○前時の学習、時代の変遷に伴う身の回りの道具の変化を思い出し、手仕事について考えるよう助言する。	・沈殿藍染色手順のプリント ・沈殿藍 ・消石灰 ・木灰汁 ・ブドウ糖 ・すくもの仕込み樽 ・ワークプリント

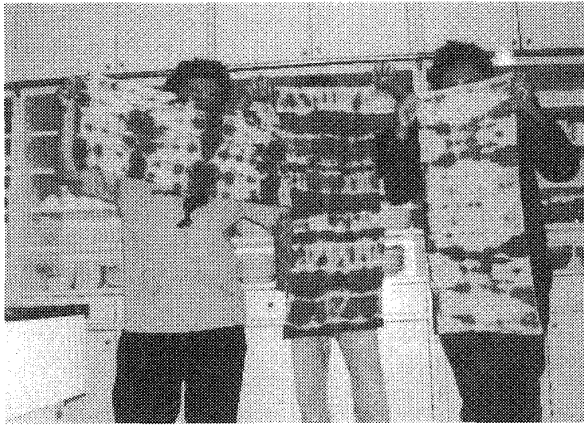


図4 完成した藍染作品

るため、出来上がりが均一ではなく違いが生じるが、それが個性を生み出し、「自分の作品も良いが友達の作品も良い」といったように、同じでないことの良さを認めあう場面がみられた。完成した作品の一部を図4に示した。

すくもの攪拌では、刺激臭があるので、いやがるポーズはみられたが、興味をもって取り組めた。触感に関しても、「柔らかい」「重い」「藻のようである」「ざらざら」「固い」などがあげられた。これらの感覚を大切にすることが、体験的に学習する上で重要であると考えられる。

生徒たちは、五感を使って、体を使って、全員染色作業に熱心に取り組み、伝統的な手仕事の大変さを理解した上で、ものとひとのかかわり、ものの大切さについて考えることができたと思われる。

5. おわりに

本論文では、植物染料を用いた伝統的な染色を教材として取り上げ、染色実習を行うとともに、その背景にある人々の生活や「こころ」を考える授業を実践した。その結果、2つの実践とともに、生徒たちは大変興味をもって染色実習に取り組んだ。色の変化やにおいなど、五感がかかわり、体を使っての作業は、生徒に驚きや感動をあえ、興味・関心をひくものであった。また、染色にかかる時間と労力から、ものへの

愛着、ものを大切にすることを学ぶとともに、昔の人にとって染められた色が重要な意味をもっていたことを考えることができた。

これらのことから、本論文のような実践授業を積み重ねることで、伝統的な生活文化と現代の自分たちの生活を考え合わせ、さらに新たな生活を創造することが可能になると考えられる。さらに、ものとのかかわり、ひととのかかわりについて考え、豊かな生活を創造することにつながると考えられる。今後も伝統的な生活文化から現代の生活を考えられるような授業に取り組んでいきたい。

文献

- 1) たとえば、生野晴美、堀内かおる、岩崎芳枝、染織教材への天然染料の適用、日本家庭科教育学会誌、34巻2号、1991年、p. 31-36
- 2) たとえば、野田美美子ら、小学校総合的な学習の時間におけるたまねぎ染色の実践、生活文化研究、44巻、2004年、p. 33-41
- 3) 武田祐吉、万葉集全講上・中・下、1976年、明治書院
- 4) 難波恒雄、原色和漢薬図鑑(上)、保育社、1966年、p. 178-181
- 5) 川口三千子、赤ちゃんの着物、季刊銀花、文化出版局129号、2002年、p. 52-53
- 6) 産着、季刊銀花、文化出版局129号、2002年、p. 112
- 7) 吉岡幸雄、日本の藍ジャパンプルー、京都書院
- 8) 筒描 幸いを祈る藍、福を招く布、サントリー美術館